

〈惠慶百首〉 浅香山恋部試注

黒木 香・今井 明・竹田正幸・田坂憲二
南里一郎・西原一江・福田智子

凡 例

- 一、歌番号 注釈のはじめに、惠慶百首における通し番号を示し、あわせて（ ）付きで資経本惠慶集における歌番号『私家集大成』中古I所収「惠慶集」の歌番号と一致）を示す。
- 二、本文 底本は、冷泉家時雨亭叢書第六十七卷『資経本私家集三』（二〇〇三年十二月刊）所収、資経本惠慶集とする。漢字仮名の区別、仮名遣い、おどり字も底本のままとし、濁点も付さない。
- 三、校 異 『惠慶集校本と研究』（熊本守雄氏、桜楓社、昭和五三年）に収められた以下の影印本を用い、語の異なりのほか、表記の違いも示す。
 - 書陵部一五〇・五五八本 略称（書古）
 - 越桐喜代子氏蔵（前田家旧蔵）本 略称（前）
- 四、語 釈 見出し語は、底本の表記のまま掲げる。ただし、歴史的仮名遣いに改めたり、濁点を付したりする必要のある場合には、見出し語の次に（ ）を付けて示す。
- 五、別 出 歌集の正式名称（『新編国歌大観』の目次に拠る）、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、詠者名、歌、左注を、順に列挙する。

六、考察 考察中での和歌の引用形式は、原則として、「和歌本文」(歌集名・部立・歌番号・詠者名・詞書)とする。

注 釈

七一 (二六六)

【本文】

(あさか山なにはづを、かみしもにをきて)

恋

はまゆふはいくへかおもひへたつらんほかねかちなるわれかよつまは

【校異】 ○はまゆふは―はまゆふの(前)

○おもひへたつらん―おもひへたつらむ(書古) 思ひたえぬらむ(前)

○

ほかねかち―ほかねにく(前)

○われ―我(書古)(前)

【語釈】 ○はまゆふ 浜木綿。海辺の砂地に生えるヒガンバナ科の多年草。『八雲御抄』に「浦の浜木綿、百重といへり」とあり、「み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へどただに逢はぬかも」(万葉集・卷四・四九六・四九九・柿本朝臣人麿)

のように詠まれる。浜木綿はさらに「重ね」「幾重」をも導くようになる。「さしながら人の心を見くまののうらのはまゆふいくへなるらん」(拾遺集・恋四・八九〇・かねもり・屏風にみくまのかたかきたる所)。当該歌もまた「いくへ」を導き出す働きをしている。○ほかねかち(ほかねがち) 語義未詳。「ほか」は、「外」「他」の意味であろう。「ね」は

「寝」「音」「根」などが考えられるが、ここでは、まず「外寝」と考え、他の場所で寝ること、外に離れて一人寝ることの意と解した。「がち」は、そのことのほうに傾いている、または傾きやすいことを表す接尾辞。：しやすいの意。浜木綿は根がしっかりしていることから、さきほどの「寝」に「根」を掛け、根が張りがちな様を「根がち」と表現したと見た。○われか(われが) 我が。わたくしの。○よつま(よづま) 夜妻。夜をともにする妻、夜だけ会う妻、隠し妻などの意味があるが、「おもひへだつ」「ほかね」との語のつながりから、ここでは独り寝をする妻の意味と解した。

【通釈】

根の張りがちな浜木綿は、いったい幾重重なって、私の思いを隔ててしまったのであろうか。他所で寝てばかりいる私の、孤閨を託つ妻は。

【別出】なし

【考察】

「はまゆふ」は、『万葉集』以来、「百重」「重ね」「幾重」を導き出す語として使われている。重なり合うイメージは『和歌植物表現事典』（東京堂）によれば、「かかり方をめぐっては諸説あるが、艶やかな葉が幾重にも重なってつく様子をいったものと見るのがよ」い、とする。語釈の項に挙げた人麻呂歌や兼盛の例にも見られたように「み熊野の（浦の）浜木綿」という使われ方が圧倒的に多いが、本歌のように「み熊野」を併用しない場合も多少ある。恵慶以前の例にも、「ゆきかへりちどりなくなりはまゆふの心へだてておもふものかは」（新撰和歌・二九八）、「はまゆふをないうらみけむしらくものへだつるやまもへだてけるよを」（斎宮女御集・一六二）があるが、「み熊野」以外の組み合わせが多くなるのは、新古今時代以降と見て良からう。『拾遺愚草』七三七番、『拾遺愚草員外』九〇番や、『明日香井集』七二五番などの例が出てくる。恵慶の当該歌は、「み熊野」の語句を使用しない比較的早い例の一つであり、また、「ほかねがち」という斬新な語を用いて、「他寝」と「根がち」を掛けるなど、固定的な詠み方から解放され、新しい語句を導入しようとする姿勢が現れていると言えるかもしれない。

「ほかね」は、和歌でも用例が皆無で、辞書類でも特に立項していない語である。「ほか（に）」と「ね」が分離した形では、「ほととぎすこゑもきこえず山びこはほかになくねをこたへやはせぬ」（古今集・夏・一六一・みつね・さぶらひにてをのこどものさけたうべけるにめして、郭公まつうたよめとありければよめる）や「やまびこのこたへざりせばほととぎすほかになくねをいかできかまし」（六条修理大夫集・四・遠くほととぎすを聞くといふ心を）などの例もあり、「ほかね（音）」とも考えられるが、「へだて」「よづま」などの語との関連から、ここでは「ほかね（寝）」と解した。「ほか

(に)「寝」の例としては、「かた時も見ねばこひしき君をおきてあやしやくよほかにねぬらん」(後撰集・恋二・六七七・藤原有文朝臣・方ふたがりけるころたがへにまかるとて)、「なにゆゑに宮このほかにたびねしてしかのなくねにこゑをそふらん」(弁乳母集・二一九)などがある。

「よづま」も「ひとよづま」の語構成の一部である物を除くと、和歌ではあまり使用されない。ただ惠慶にはもう一首「あけがたのながき秋の夜ひとりぬるよつまなにごと思いつらむ」(二二三)と詠んでおり、独り寝をする女のイメージがある。同時代の用例としては、「…うとむ心ぞ つきそめし たれかよつまと あかしけん…」(蜻蛉日記・天禄二年・五九・兼家)があり、後には「君がためやよひになればよづまさへあへのいちぢにははこつむなり」(散木奇歌集・一四八・三月三日人のがりいひ遣しける)や『久安百首』七三六番などの例がある。

七二 (二六七)

【本文】

ひるまなくなみたの河にしつむかなこゝろかろしとおもひしるく

【校異】○河―かは(前) ○かな―哉(前) ○こゝろ―心(前) ○おもひ―思ひ(前)

【語釈】○ひるま 干る間。乾く間。 ○なみたの河(なみだの河) 涙の河。涙が激しく流れるさまを川に見立てたもの。 ○こゝろかろし(こころかろし) 思慮が浅い、気が変わりやすい、軽薄だ。ここでは自分が「思慮が浅い」としてゐるのではなく、相手が「移り気である」の意と考えた。 ○おもひしるく(おもひしるしる) 思ひ知る知る。分かっているながらも、の意。「しるしる」は動詞を二つ重ねて反復継続の意を示す用法。

【通釈】

私は袖の乾くいとまもなく、涙の川に沈んでいることだ、あの人が移り気であることは分かっているながらも。

【別出】なし

【考察】

「ひるまなく」は、ここでは涙の乾くいとまもないことをいう。「ひるまなくよるはすがらにたえずのみいしくのはら(ママ)しげきわがこひ」(好忠集〈順百首〉・五二五・恋十)のように、「昼間」を掛けて「夜」と対照的に用いるのが安定した表現である。また「朝」「夕」などの語との組み合わせもある。当該歌の場合は和歌の中にそのような語はないが、前歌の「はまゆふ(「夕」を響かせる)」「(ほか)寝」「夜(づま)」と対応させる効果もあろうか。百首歌として、就中「浅香山難波津」の文字を置く歌として、一括して読まれたであろうから、発想も含めて、前後の和歌との関連は考えるべきであろう。

「なみだの河」は、「篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙の河にうきてもゆらむ」(古今集・恋一・五二九)、「はやきせに見るめおひせわが袖の涙の河にうゑましものを」(古今集・恋一・五三二)以来、極めて多用される。「ひるま」と「なみだの河」を組み合わせたものに、「せきもあへぬなみだのかはにおぼほれてひるまだになき衣をぞきる」(大式高遠集・二八〇・同長恨歌に、あはれなる事ありしをかきいでて、歌十六をよみくはへてやる 君王相顧尽霑衣)があり、また、「なみだ(の)河」に「しづむ」という表現は、「なみだがはたもとにふちのなかりせばしづむもしらであらんとやせし」(宇津保物語・国ゆづりの上・八一五・実忠)に見える。

「こゝろかろし」は音節数の多い語であるが「こゝろかろくも」「こゝろかろさ」も含めて、和歌でも一定数の用例がある。「いでていなばこゝろかろしといひやせんよのありさまを人はしらずて」(古今六帖・第四・二四七一・かなしび)、「きみがすむのにもやまにもおもひやるこゝろかろくやひとをわするる」(斎宮女御集・一五一)、「なつはぎのあさのをがらとあだひとのこゝろかろさといづれまされり」(好忠集・一六一)などが挙げられる。

また「：しるしる」は、重複歌を含めて約五〇例を数えることができるが、そのうち当該歌のように結句に用いられるものは二〇例以上あり、全用例中の四割を占める。代表的なものとして、「なにせむに結びそめけんいはしろの松はひさしき物としるしる」(拾遺集・恋二・七四二・よみ人しらず・あるをとこの松をむすびてつかはしたりければ)、「ともし

ればかへるはるをもをしむかなめづらしげなきこととしるしる」(好忠集・四九四)などがある。また「しるしる」に上接する語は、「ものとしるしる」の形が約二〇例と最も多く、ついで「身とはしるしる」「世よとはしるしる」「人としるしる」などが使われている。「思ひしるしる」の例としては「憂き事と思ひ知る知る暁の別るる毎になほまどふかな」(浜松中納言・卷五・一一一・中納言)の例がある。

七三 (二六八)

【本文】

とをければこひしきこともなくさますいつくなるらんいかすむいへ

【校異】 ○こひしき―恋しき(前) ○いつくなるらん―いつこなる覧(前) ○いへ―家(前)

【語釈】 ○とをければ(とほければ) 遠いので、遠いために。 ○なくさます(なぐさまず) 「なぐさむ」は気分が晴れる、気持ち平静になるの意。 ○いつく(いづく) 指示代名詞、不定称。場所を表す。 ○いも 男が女を親しんでいう語。主として妻や恋人・姉妹にいう。「兄(せ)」の対。惠慶の時代には、万葉風の古語であったと見られる。

【通釈】

遠く離れているので恋しく思う気持ちも慰まない。どこなのであろうか、恋しいあなたが住む家は。

【別出】なし

【考察】

「とほければ」を初句に置いた用例には、「とほければおもひはずともわすれなむかたみをわけておくるまされり」(忠見集・一二四・ものにいく人にぬさやるとて)がある。忠見歌の「遠さ」は物理的距離として示される。一方、惠慶歌における距離感はそのまま、恋しい人との心の隔たりを強く印象づける。

「こひしき」という語は、眼前にいない人に対して切実な慕情・愛情を抱き、逢いたいと遙かに思いやる気持ちを表わ

すものである。その心が「なぐさま」ない理由を初句に配したこの詠みぶりは、「わが恋は猶あひ見てもなぐさまずいやまさりなる心地のみして」（拾遺集・恋二・七二三・よみ人しらず）や「まどろむに恋しきことのなぐさまばね覚をさへは恨みざらまし」（続拾遺集・恋二・八三九・俊頼朝臣・いかなりける時にか女につかはしける）に対して、自分の恋心を分析的に解釈しているといえよう。

三句までの冷静さに反して、後半は一転して詠嘆に近い詠み方になっている。「いづく」「いも」「いへ」と、「い」音を語頭にもつ語を三つ連ねることによって、慰まない恋しさを重層的に表現している。

なお、「いづくなるらん」という語句には、「恋ひわびぬねをだになかむ声たてていづこなるらんおとなしのさと」（拾遺集・恋二・七四九・よみ人しらず）という用例がある。また、「いもがすむいへ」と同意の「いもがいへ」には、「あまのかはうちはしわたすいもがいへとどまらずかよへときまたずとも」（赤人集・三一七）が見出せる。惠慶の当該歌は、「いもがいへ」の語句を結句七音にあてはめるため、多少くどくなるが、「すむ」の語を挿入したのであろう。

七四 （二六九）

【本文】

をちかたや山ちへたてゝうとましくいゑるすへしやおのかさとく

【校異】○山ちへたてゝ―山うちへたて（前） ○おのか―をのか（前）

【語釈】○をちかた 遠くの方。 ○山ち（山ぢ） 山の道。 ○へたてゝ（へだてて） 「へだつ」は、間をふさいで遮る、男女の間を遠ざけ妨げるの意。歌では、「ころも」「中のころも」の縁語として用いられることが多い。 ○うとましく 「うとまし」はいとわしい、好感が持てないの意。 ○いゑるすへしや（いへるすべしや） 「いへるす」は、家を建てて住む意。「や」は反語。「べしや」で、…してよいものか、いや、そうではない。「みわやまをしかもかくすかくもだにもこころあらなもかくさふべしや」（万葉集・一八・額田王）。

【通釈】

なんと遠いことか。恋しいあなたの家とは山道をへだて、二人の仲までもへだてられている。このように疎遠な状態のまま、互いの家をかまえていてよいものか、私とあなたのそれぞれが住む里で。

【別出】なし

【考察】

恋しく思う人と遠く隔てられた辛さを詠んだ点で、七三（二六八）番歌と同じ趣をもつ歌である。

「をちかた」は「うちわたすをちかた人に物まうすわれそのそこにしろくさけるはなにの花ぞも」（古今集・雑体・旋頭歌・一〇〇七）、「をち方の花も見るべく白浪のともにや我もたちわたらまし」（拾遺集・雑春・一〇四二・つらゆき）のように、「をちかた人」や「をちかたの」の形で用いられ、惠慶歌のように「をちかたや」の形で用例は、「をちかたや外山のすそぞ恋しともいはでおもへばしる人もなし」（歌枕名寄・四九〇〇・俊頼朝臣・岩手）、「をちかたや都のたつみたれすみてま木のすみがまけぶりたつらん」（夫木抄・冬三・七五五九・皇后宮大夫俊成卿・文治六年五社百首、炭竈）など、時代が下る。

初句で示された「遠さ」の要因は「山ぢ」である。「ぬれてほす山ぢの菊のつゆのまにいつかちとせを我はへにけむ」（古今集・秋五・二七三・素性法師・仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる）、「なげ木こる山ぢは人もしらなくにわが心のみつねにゆくらん」（拾遺集・恋五・九七〇・藤原有時）にあるように、山道は恋する二人の心をも隔てる険しさを感ぜさせる。

「うとまし」の用例は少なく、同時代の用例としては、「のがるれどうとましくこそおもほゆれこやなに人のみそのなるらん」（兼澄集・四八・くら人にて侍りしをりうへの人のさが野にはな見にまかりたりしに、むまこそといひし人のあまにてゐたるところのはたけといふ物をつくりてよろづのものをうゑて侍りしかば、それをだいにてかはらけとりて）が見られる程度である。三句の「いへるす」を修飾し、互いの住まいが遠く離れている状態を、嘆く気持ちを表現する語と

して用いられている。

結句「おのがさとさと」は、「うの花のさかりになればやまがつのおのがさとさとといづる月かげ」（殷富門院大輔集・三五・なつ）、「ことわりやおのがさとさとふりすててすみよしとのみ思ひがほなる」（同・二二四・又けこのうつはものなどおきつつ、しひの葉にももらぬにや、すみなれたるさまどもしたるに）に例がある。また「さとさと」ならば、「さとさとになくとつげつるほととぎすまつわがやどにおとづれもせぬ」（兼澄集・九三・四月ついたちごろもとすけこれかれしてさけたうぶるついでに、ほととぎすのなかなぬよしを申ししに、人人のみなききたるよしをかたりしかば）が見える。

七五（二七〇）

【本文】

おくやまのほそたにかはのいはまよりさすかにたえぬつまのあやしさ

【校異】

○たえぬ―たへぬ（前）

【語釈】 ○おくやま 奥山。人里離れた奥深い山。深山。『万葉集』にも用例を見出すことができるが、それらは聖なる異空間としての性格を基本とする（『歌ことば歌枕大辞典』「奥山」寺島恒世氏）。平安時代以降は、「とぶとりのこゑもきこえぬ奥山のふかき心を人はしらなむ」（古今集・恋一・五三五・読人しらず・題しらず）や、『古今集』五五一番、『拾遺集』六六一番、同九一四番などの恋歌に見られるように、人里と隔絶された孤独感と人恋しさに悩まされる場として詠まれるようになる。恵慶の当該歌もそうした平安時代以降の系列に連なるものである。○ほそたにかは（ほそたにかは） 細谷川。流れの細い谷川。先行例に「おほきみの御笠の山の帯にせる細谷川の音のさやけさ」（万葉集・雑歌・一一〇六・一一〇二）や、『古今六帖』一二七八番にも採られた「まがねふくきびの中山おびにせるほそたに河のおとのさやけさ」（古今集・神遊歌・一〇八二）などがある。○いはま 岩間。岩と岩の間。特にそこを水が流れる様が詠まれていることが多い。恵慶の当該歌も「細谷川」を詠み込むことで、水と関連させて用いられている。○より 動作の経由点

を示す。…を通過して。ここでは、岩間から細く絶えることなく川の水が流れ出る様子を表現したものと見た。○さすがに(さすがに) そうはいうもののやはり。それでもやはり。○たえぬ 「たえ」は動詞「絶ゆ」の未然形。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。「細谷川の」の述語であるとともに、体言「つま」を修飾する。「たえぬつま」と同類の表現に、本試注五九(二五四) 番歌結句「たえぬわかせこ」がある。○つま 夫婦や恋人が互いに相手を呼ぶ語。○あやしさ 普通と違っている感じであること。不思議だ。結句を「あやしさ」と置く歌は、本試注五六(二五一) 番にもある。

【通釈】

奥山の細い谷川が、岩間を通過して、それでもやはり絶えることのないように、絶えることのないつまへの想いの不思議さ。

【別出】なし

【考察】

奥山の岩間から流れ出る細谷川の流れと、「つま」への想いは、細々とはあるが、絶えることはない。物象に心象を重ね、その状態を「あやし」(理解しがたい)と表現した歌である。初句から第四句「さすがにたえぬ」までで、細谷川の絶えることのない水の流れを言い表し、同じく第四句「さすがにたえぬ」から結句までが「つま」への絶えることのない想いを言い表していると解釈した。

「さすがに」の用例には、「あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるものから」(古今集・恋五・七八四・業平朝臣)のありつねがむすめにすみけるに、うらむることありてしばしのおひだひるはきてゆふさはかへりのみしければよみてつかはしける)や「名にはいへどくろくも見えずうるし河さすがに渡る水はぬるめり」(拾遺集・雑下・五四九・よみ人しらず・題しらず)などの歌がある。歌語としてすでに定着していたと思われるが、当該の惠慶歌にある「さすがにたえぬ」という歌句を持つ歌は「かひなくてさすがにたえぬ命かな心を玉の緒にしよらねば」(和泉式部続集・四九・つきせぬ事をなげくに)という和泉式部の歌が見出せるだけである。この和泉式部歌も、無駄な命であるのにそれで

もやはり絶えることがないと詠んでいる。恵慶歌からの影響と見なすこともできよう。

また、「岩間」と「絶ゆ」とを共に詠み込んだ歌には、「せきかはのいはまをくぐる水あさみたえぬべくのみみゆる心を」(大和物語・第百六段・一六二・中興の女)、「いはまにはこほりのくさびうちてけりもりこしみづもたえておとせず」(好忠集・三一九・十一月中)や、「そまやまのたにのつららやとぢつらんいはまの水のおとたえぬなり」(四条宮下野集・一三六)などがあるが、恵慶以前、あるいは同時代の例は、それほど多くない。右の三首はすべて、岩間から流れる水が絶えそうなこと、あるいは絶えてしまったことを詠んでいるが、恵慶の歌は絶えないで流れる水を詠んでいる。そうした点もまた、恵慶歌の斬新さと評価できるのではなからうか。

七六 (二七一)

【本文】

もかりふねあきつのうらにさほさしておもふつまとちこきつゝそゆく

【校異】 ○もかりふね―もかり舟(書古) ○あきつのうら―秋へのうら(前) ○さほ―さお(前) ○おもふ―思

(前) ○こきつゝそゆく―さしつゝそ行へ「さし」の左傍に「こき」(前)

【語釈】 ○もかりふね(もかりぶね) 藻刈舟。ワカメやコンブなど、食用の海藻を刈り取り、運ぶ舟。「藻刈舟おきこぎくらし妹が嶋形見の浦に鶴かけるみゆ」(万葉集・卷七・雑歌・一二二八・一一九九)、『古今六帖』一八四七番にも載る「もかり舟今ぞなぎさにきよなるみぎはのたづのこゑさわぐなり」(拾遺集・雑上・四六五・よみ人しらず・題しらず)などの詠作例がある。平安時代以降ではこの恵慶歌が最もはやいものである。この語を和歌に復活させたのは恵慶だったのではなからうか。 ○あきつのうら 『夫木抄』は「あきつのうら 撰津」とするが、具体的な地名を比定しがたい。この「あきつのうら」を詠み込んだ和歌は、管見の限りでは当該の恵慶歌だけである。 ○さほさして(さをさして) 「さをさし」は動詞「さをさす(棹刺)」の連用形。棹を操って舟をこぎ進めること。 ○おもふつまとち(おもふつまど

ち) 「つま」は、夫婦や恋人が互いに相手と呼ぶ語。「どち(共)」は接尾辞。互いに同類の意を表す。同士。○こぎつゝそゆく(こぎつゝぞゆく) 漕ぎつゝぞ行く。「つゝ」は反復・継続の意味の接続助詞。

【通釈】

もかり舟はあきつの浦に棹を操って舟を進め、想い合う夫と妻同士が、舟を漕いではまた漕いで行く。

【別出】

『夫木和歌抄』卷第二十五、雑部七、一一六〇八番

あきつのうら、撰津

家集 恋歌中

惠慶法師

もかり舟あきつの浦にさをさして思ふつまどちさしつゝぞゆく

『歌枕名寄』卷第三十三、南海部 紀伊国、八五二二番

(秋津野) 浦 大和国吉野篇入之、歌悉載于彼所了 里 或先達歌枕当国入之、 此野若巨両国歟)

浦

(惠カ)
忠業

もかり船秋津の浦にさをさしておもふ人どもこぎつゝぞゆく

【考察】

「あきつのうら」の詠作例は、当該歌以外管見に入らない。「あきつ」ならば、「あきつしま(秋津島)」や「あきつ(秋津野)」などの地名の中に出て来る。いずれも『万葉集』に見える地名で、大和国ひいては日本そのものを指すようになった歌語である。惠慶の詠作の根拠がどこにあるのか、具体的には詳びらかにしえないが、あるいは「あきつしま」などから造語されたものかも知れない。

第三句の「さをさして」は、『伊勢物語』第七十段にも見える「みるめかる方やいづくぞさをさしてわれにをしへよあまのつり舟」(新古今集・恋一・一〇八〇・業平朝臣・題しらず)の他、「みつ川のふちせもしらずさをさしてかりのころ

もてほす人もなし」(古今六帖・第三・一五七五・かは)、「さをさしてきつる所は白波のよれどとまらぬあじろなりけり」(貫之集・四六七・人人ふねにのりてあじろにいけり)、「つみておくれあまの釣舟さをさして松の干とせも鶴のよはひも」(元輔集・三七・その日さいわうのものすはまに、つるあまの釣ぶねこ松などあるを)などを見出すことができる。

第四句「おもふつまどち」もまた他に類例を見ない。「つまどち」という表現は、「鴨すらもおのが妻どちあさりしておくるる間に恋ふといふものを」(万葉集・卷十一・三一〇五・三〇九一・寄物陳思)にあり、また「おもふどち」であれば「梅の花今盛りなり思ふどちかざしにしてな今盛りなり」(万葉集・第五・八二四・八二〇・雑歌)や、「おもふどち春の山辺にうちむれてそこともいはぬたびねしてしか」(古今集・春下・一二六・そせい・春の歌とてよめる)などの例がある。しかし、「おもふつまどち」の用例はないようである。とすると、この語も恵慶の合成語ということになるのだろうか。「あきつのうら」と言い、「おもふつまどち」と言い、万葉風の言葉造語していたとすると、この歌もまた万葉集の世界を想わせることを狙って、恵慶が作ったものと考えるべきであろう。

七七 (二七二)

【本文】

ふしのみねけふりたえせぬこひといへとよのつねならぬわれをとらめや

【校異】○こひといへと―恋てへと(前) ○よのつね―世のつね(前) ○われ―我(前) ○をとらめや―おとらめや(前)

【語釈】○ふしのみね(ふじのみね) 「富士」は、駿河国の歌枕。日本の最高峰。平安時代にはしばしば噴火していた。恋の歌に詠まれることが多く、富士の煙を、「思ひ」の「ひ(火)」から立つものとする技巧が常套である。なお、「富士の峰(ね)」、「富士の高嶺」の用例は多いが、「富士の峰」は極めて稀である。○たえせぬこひ 「たえせぬ」は、「絶えず」(動詞「絶ゆ」の名詞形「たえ」に形式動詞「す」が付いたもの)の未然形に、打消の助動詞「ず」の連体形が接

続したものの。絶えることのない恋。「こひ(恋)」に「火」を掛ける。○よのつねならぬわれ 「世の常」は、世間並み、普通。「世の常ならぬ我」で、世間一般にはないような(恋をした)私、の意。○をとらめや 「めや」は、助動詞「む」の已然形「め」に、係助詞「や」が付いたもの。反語の意を表す。

【通釈】

富士の峰に煙の絶えることがないように、絶えることなく一途に思い続ける、燃えるような恋とはいうけれど、世間にまたとない恋をした私は、富士の煙に劣るだろうか。いや、劣ることはあるまい。

【他出】 なし

【考察】

絶えることのない富士の煙は、一途な恋心の比喩として用いられるが、そんな恋をごく一般的なものとして位置付ける一方、自らの恋を、富士の煙に喩えられる程度を超えた、めったにないものとして詠んだ歌である。

「ふじのみね」の用例は、『新編国歌大観』を検しても、『秋篠月清集』三七九番や『菊葉集』冬、九一五番の他、「恋しさをなにとするがの富士の峰の煙たえせぬ我が思ひかな」(菊葉集・恋一・一一二・道闍法師・寄煙恋を)など、後世の歌のみである。中でも道闍法師歌は、「煙たえせぬ」も当該歌と一致しており、惠慶歌を踏まえた作と推察される。

もっとも富士山は、惠慶の当該歌のほか、たとえば、「ふじのねのけぶりたえずとききしかどわがおもひにはおくれざりけり」(九条右大臣集・六〇・また)や、「…むねのうち もえのみわたり かやりびの けぶりをいかで おとにきくふじのやまにも くらべむと…」(能宣集・三〇八)にも見られるように、煙が絶えない山として広く知られていた。

惠慶と交友のあった能宣は、ほかにも「はるふかみまだきつけたるかやり火のみゆるはふじのけぶりなりけり」(能宣集・二〇六・あるところの屏風の歌、ふじの山ちかきところの人に人はいへ侍り)という屏風歌を詠んでいるが、絵の図柄にも噴火する富士山が描かれていたようである。また、「天曆御時中宮歌合のかちわざに、ふじの山ぢんしてつくりて、いただきよりいだせるけぶりのしたに、…」(清正集・九〇)と記されるように、歌合の勝態の品としても、富士山は噴煙を上

げる姿に作られる。

「ふじ」の「けぶり」を恋心の比喩に用いた歌は、恵慶と同時代、もしくはそれ以前の歌集を繙くだけでも、「ふじのねのならぬおもひにもえばもえ神だにけたぬむなしけぶりを」(古今集・誹諧歌・一〇二八・きのめのと)、「ふじのねをよそにぞききし今はわが思ひにもゆる煙なりけり」(後撰集・恋六・一〇一四・あさよりの朝臣・思ひかけたる女のもとに)の他、『後撰集』恋六、一〇一五番、『朝忠集』五九番・六〇番、『伊勢集』二〇七番、『斎宮女御集』一〇九番、『能宣集』一七二番と、枚挙に遑がない。また、日記や物語中の和歌にも、「…いつしかまつのみどりこを ゆきてはみむと するがなる たごのうらなみ たちよれど ふじのやまべの けぶりには ふすぶることの たえもせず…」(蜻蛉日記・天禄二年・五九・兼家)や、『平中物語』第九段、五二番・五三番、同第十一段、五八番・五九番をはじめ、「なぞもかくいける世をへてものをおもふするがのふじのけぶりとえせぬ」(多武峰少将物語・一〇・あい宮)などが散見する。特に『多武峰少将物語』一〇番は、「けぶりとえせぬ」という句を含む点も、当該歌と共通する。

また、「たえせぬ」「こひ」の歌は、「せをはやみたえせぬ物ほこひにぞ有りける」(後撰集・恋六・一〇五九・よみ人しらず・題しらず)、「篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬほのほなりけれ」(源氏物語・篝火・三八四・光源氏)や、『右兵衛督家歌合』〈元永元年〉三〇番、長実朝臣歌などの用例を挙げることができる。

「よのつね」ではない「われ」の恋心を詠んだ歌としては、「いへば世のつねのこととや人はみむわれはたぐひもあらじとおもふを」(重之女集・八九・恋廿)が挙げられよう。恵慶の当該歌と同じく、百首歌中の一首である。

結句「我おとらめや」の恵慶以前の用例としては、「秋なれば山とよむまでなくしかに我おとらめやひとりぬるよは」(古今集・恋二・五八二・よみ人しらず・これさだのみこの家の歌合のうた)がある。当該歌と同じ恋歌である。

七八 (二七三)

【本文】

もしほやくけふりにこひをくらふれはまさらさりけりするかなるたこ

【校異】 ○けふりにこひを―けふりと恋を (前)

【語釈】 ○もしほ 海藻から採る塩。海藻を簀子の上に積み、海水を掛けて焼いた後、水に溶かして、うわ澄みを釜で煮詰めてつくる。 ○こひ 恋。「火」を響かせる。 ○するかなる (するがなる) 「駿河国にある」の意。駿河国は、

現在の静岡県の一部。 ○たこ (たご) 地名。ここでは田子の浦を指す。静岡県富士市の富士川東岸の海浜。背後に富士山を負い、前面に駿河湾を望む。白砂青松の景勝地。当該歌のように、「田子」という地名が単独で和歌に用いられた例は珍しい。「こ」で終わらねばならない杳冠歌であるため、多少無理をしたのかもしれない。

【通釈】

藻塩を焼く煙に、恋 (に身を焦がす煙) を比べると、藻塩の煙は、恋の炎の煙に勝ることはないなあ。駿河国にある田子は。

【他出】 なし

【考察】

「もしほやく」場面は、惠慶の頃までに、「もしほやくあまのたくひのけぶりこそおもふかたにはたちのぼりけれ」(躬恒集・一七三・その屏風障子等歌、所所のだいにしたまふ)、「もしほやくけぶりになれしすまのあまは秋たつきりもわかずやありけむ」(中務集・二七・すま)などの屏風歌や、「もしほやくあまのたく火のしたにのみもえつつからきわれにやはあらぬ」(元真集・一九九)、「もしほやくけぶりになるあまごろもいくそたびかはそでのぬれける」(斎宮女御集・一三・又、女御)、「もしほやくけぶりになるあまごろもうきめをつつむそでにやあるらん」(同・一三五・御かへし)といった少なからぬ歌に詠まれている。

田子の浦における塩焼きは、永観元（九八三）年、藤原為光障子絵の図柄に見え、恵慶との交友が認められる能宣や兼澄によって、「たごの浦に霞のふかく見ゆるかなもしほのけぶりたちやそふらん」（拾遺集・雑春・一〇一八・よしのぶ・小一条のおほいまうちぎみの家の障子に）、「たごのうらのもしほのけぶりうちがすみのどけくみゆる春のそらかな」（兼澄集・一二二・たごのうら 春）と詠まれた。このような風景が、当時、障子の図柄として定着していたことが窺える。

結句「するがなるたご」と全く一致する句は、他に見当たらない。「するがなるたごのうらなみ」という表現が一般的で、「するがなるたごの浦浪たたぬひはあれども君をこひぬ日はなし」（古今集・恋一・四八九）をはじめ、「わが恋はなぐさめかねつするがなるたごのうら波やむ時もなく」（信明集・一〇・田子浦）、「ものおもひはわれもさこそはするがなるたごのうらなみたちやまずして」（多武峰少将物語・一一・女ぎみ）などが詠まれている。

なお、『宇津保物語』には、「しらなみのまさごをすすぐたごの浦におくれてなぞもなげく舟人」（宇津保物語・忠こそ・一一一・千陰）、「ひまもなくなみかかるとふたごの浦によするなる名をや形見にはせん」（同・同・一一一・左近中将）、「するがなるうらならねどもしらなみはたごといふなにもたちかへりけり」（同・同・一一三・さゑもんのすけ）という一連の歌が見える。「田子の浦」は「子」の名をもつ。特に千陰の歌では両者は掛詞になっている。

とすると、当該歌においても、地名「田子」が掛詞になっている可能性を想定してみたくなってくる。すなわち、「藻塩焼く」海人（漁師）の存在を言外に認め、これに対する「農夫」の意が、地名「田子」に掛けられていると考えられないうであろうか。農夫の意の「田子」は、「五月雨に苗ひきううるたごよりも人をこひぢに我ぞぬれぬる」（古今六帖・八八・五月）、「袖ぬるるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子のみづからぞうき」（源氏物語・葵・一五五・六条御息所）といった例からも看取されるように、掛詞「こひぢ（泥・恋路）」とともに詠まれることが多く、当該歌の「こひ（恋）」も、ひょっとするとここから連想されたのかもしれない。とすれば、「田子の浦では、その名の通り、田子（農夫）の恋の炎の煙のほうが、海人（漁師）の藻塩を焼く煙よりもまさっている」という意になるうか。後考を待ちたい。

最後に、歌の構造を見てみると、まず、「…に…をくらぶれば」という歌は、恵慶とほぼ同時代には、「朝がほに露のい

のちをくらぶれば花の匂ひはひさしかりけり」(海人手古良集・七〇・無常)、「うぐひすのなくねにおいをくらぶればまたはつこゑのこちこそすれ」(大式高遠集・一五八・三月つごもりに和歌七首せしに)といった例が挙げられる。また、「くらぶれば…ざりけり」の例としては、「あひ見てののちの心にくらぶれば昔は物もおもはざりけり」(拾遺集・恋二・七一〇・権中納言敦忠)が有名で、他に「かたきなく思へるこまにくらぶれば身にそふかげはおくれざりけり」(信明集・一三五・五月のせちにやあらん、だいたしかにしらず)もある。

七九 (二七四)

【本文】

野も山もこひしきまゝにわけくれとみえやはしけるわかおもふ人の

【校異】 ○みえ―みに^えへ「に」を消して「え」に訂正 (前) ○しける―^{しける}したか (前) ○おもふ人―思人 (前)

【語釈】 ○まゝに (ままに) 事態の成り行きに従って下句の事態が成立することを示す。…にまかせて。…とおりに。

○わけくれと (わけくれど) 分け入って来たけれど。「わけくる」は、茂みなどをかき分けて来るの意。○みえやはしける 「見ゆ」は自動詞。(他人から見られるの意から) 人に会う。顔を合わせる。対面する。「やは」は反語。見えはするだろうか、いや見えない。逢えない。○わかおもふ人の (わがおもふ人の) 「わがおもふひと」は、万葉時代からある言い方。自分が心を寄せる人の意。「の」は主格。

【通釈】

野も山も、恋しい気持ちにまかせて分け入って来たけれど、私が思う人は見えず、逢えはしなかった。

【別出】 なし

【考察】

恋しい人を追って野山に分け入ってみたが、その人には逢えなかったという歌である。これと同趣の歌が、好忠集所収

〈順百首〉にある、「のもやまもいろかはりゆく風さむみいかでたづねんわすれにしせこ」(好忠集〈順百首〉・五四八)である。この歌も同じく「浅香山難波津」歌群中にある。惠慶の当該歌は、あたかも順のこの歌への返歌のように見える。両者の詠歌状況には、緊密な関連のあることが窺えよう。

第二句の「恋しきままに」という句は、『新編国歌大観』を検すると当該歌が初出のようである。「野山に分け入って恋しい人を探す」といった趣旨の歌は、管見では見いだせない。第三句の「わけけれど」も例が少なく、惠慶以前では、「花のなかめにあくやとてわけけれどどこころぞともにちりぬべらなる」(遍昭集・三三二・はもじをかみにて、なもじをしもにて、ながめをかく)がある程度である。

第四句の「みえやはしける」は、他に例を見いだせない。この「やは」の結びとしては、「ける」よりも推量の助動詞が期待される場所である。「みえやはしけむ」の例ならば、「そでのいろもみえやはしけむあさがほのひるはうつろふわかれならぬに」(中務集・一八五)や、「あはれとはみえやはしけんをばすてのおもひはなれしつきのひかりは」(一条撰政御集・一八二)がある。なお、この箇所について、前田家旧蔵本には「みにやはしたか」を底本と同じ「みえやはしける」に訂正する書き入れがある。「みにやはしたか」では、語法の問題があり、解釈できない。

結句の「わがおもふ人」という語句は、「大野らに小雨ふりしく木のもとに時とよりこね我がおもふ人(我念人)」(万葉集・卷十一・二四五七・二四六一)のように、万葉時代から見える。特にこの万葉歌は、惠慶の当該歌と同じく、この語句を結句に置いている点、留意されよう。同様の歌は、惠慶と同時代にも、「いなづまの影をもよそにみるものをなになたとへんわが思ふ人」(宇津保物語・としかげ・一一一・俊蔭女)がある。句の位置にこだわらなければ、他にも、「かぎりなくわがおもふ人の行く野べは色やちくさに花ぞさきける」(貫之集・一八一・馬車にのりて人の花みたる所)や、「わかれぢはわがおもふ人のふみなれややらでのみこそ見まくほしけれ」(小大君集・一五三・おなじ人のもとにいかんとするに)が見いだせるが、やはり有名なのは『伊勢物語』にもある「名にしおはばいざ事とはむ宮こどりわが思ふ人はありやなしやと」(古今集・羈旅・四一一)であろう。「わがおもふ人」には、恋しい人、思いをよせる大切な人が目の前に

ないという含意があり、この語に関しては、当該歌もそうした定型の用語法を踏襲しているといえる。

八〇 (二七五)

【本文】

かつ見れとものをそおもふあた人のとまらてつるにわかるへければ

【校異】○見れと—みれと(書古)(前) ○ものをそおもふ—物をこそ思へ(前) ○あた人—あたひと(書古) ○

つるに—ついに(前)

【語釈】○かつ ある行為や心情が、他の行為や心情と並んで存在する関係にあることを表す。一方で。他方で。○あたひと(あだびと) 心に実のない、移り気な人。浮気者。○とまらて(とまらで) 「とまる」は、行かないでいる、残る。後の「別る」とは、意味的に対立すると見る。○つるに(つひに) 行為や状態が、最終的に実現するさまを示す。最後に。とうとう。結局。いよいよ。○わかるへければ(わかるべければ) 別れるはずなので。「別る」は、遠く離れる。離別する。

【通釈】

一方ではこうして逢っているけれど、私は物思いをする。浮気なこの人は私の元にとどまらず、最後には別れてしまうだろうから。

【別出】なし

【考察】

「物をぞ思ふ」のは女、「あだ人」を男と見て、浮気な男が自分から離れていくことを思い悩んだ、女の歌と解釈した。初句の「かつ」によって、「見る(見れ)」と「物をぞ思ふ」とが対比される。こうした語法の歌として、「かつこえてわかれもゆくかあふさかは人だのめなる名にこそありけれ」(古今集・離別・三九〇・つらゆき・藤原のこれがかがむさ

しのすけにまかりける時に、おくりにあふさかをこゆとてよみける)や、「かつ見れどうとくもあるかな月影のいたらぬ
さともあらじと思へば」(古今集・雑上・八八〇・きのつらゆき・月おもしろしとて凡河内躬恒がまうできたりけるによ
める)がある。特に後者は、初句「かつみれど」が一致する上に、二句切れであり、第三句末尾に主格の助詞「の」がき
て、結句が確定条件である点も共通する。惠慶の当該歌は、この貫之歌から着想を得た可能性があろう。

第二句の「ものをぞおもふ」は『万葉集』に四例、平安中期までを視野に入れると、全部で一〇例ほどを拾うことがで
きる。そのうち、男女関係について詠まれた例として、「橋の蔭ふむ路の八衢に物をぞおもふ(物乎曾念)妹にあはずし
て」(万葉集・卷二・一一五・一二五)、「そこひなくものをぞ思ふあかでのみわかることをなげくころは」(千里集・
一〇四・沈吟離別惜)、「いたづらに物をぞおもふまつほどのいのちもしらずけふやけふやと」(和泉式部集・七七四・た
だにあるをとこの、とかくあらんにはかならずきてみんといひたるが、そのほどになるに、おそくきければ)を挙げてお
く。

一方、前田家旧蔵本にある異文「ものをこそおもへ」は『万葉集』に用例はない。しかし、平安時代に入ると用例が豊
富で、主に結句に用いられる。勅撰集では『拾遺集』以後、数首ずつ採られている。ただし、第二句に用いられる例は僅
少であるため、惠慶の当該歌の場合、この本文を採ることに躊躇される。

「あだびと」は、勅撰集では、「あきといへばよそにぞききしあだ人の我をふるせる名にこそ有りけれ」(古今集・恋五・
八二四・よみ人しらず)をはじめ、三代集と『詞花集』以下に散見するが、特に『後撰集』には五例と目立っている。
『古今六帖』や十世紀中葉の歌人の家集に用例があり、惠慶にももう一首、百首歌中に(本稿底本では二八七番)、「いで
たてばうしろめたなきあだ人よめぐりにすゑてはなたずもがな」(惠慶集・二九八・ひと夜めぐり)があり、同時代であ
る好忠にも「なつはぎのあさのをがらとあだびとのこころかるさといづれまされり」(好忠集・一六一・六月はじめ)が
ある。

「あだびと」が留まらず、最終的な別離が予想されているが、「つひにわかる」ことを詠んだ歌に、「あひみてもあはで

もつひにわかれぬるしばしばかりのよをなうらみそ」(清正集・六四・又人、かへしにこそあめれ)がある。だが、結句の「わかるべければ」という句は、惠慶の当該歌でしか見ることができない。

八一 (二七六)

【本文】

はまちとりふみくるあとをとめつゝもこひしき人にたつねてしかな

【校異】○はまちとり―はま千とり(書古) ○ふみくる―ふみゝる(前) ○とめつゝも―とめつゝは(前) ○人に―人を(前) ○かな―哉(書古)(前)

【語釈】○はまちとり(はまちどり) 浜辺にいる千鳥。 ○ふみくるあと 「ふみ」は「踏み」と「文」とを懸ける。浜千鳥の「あと」は、筆跡の意。「うちよするなみやけつらんはま千鳥ふみこしあとのうら見れどなき」(古今六帖・第五・三三七四・ふみ)のように、波に消されてしまうことから、頼りなく、はかないイメージがあるか。なお、「白波のうちかへすとも浜千鳥猶ふみつけて跡はとどめむ」(貫之集・六六六)という歌もある。 ○とめつゝも(とめつつも) 「とむ」は「止む」。 ○たつねてしかな(たづねてしかな) 「たづぬ」は、尋ねる、問いただすの意か。「てしかな」は、…したいものだ、の意。

【通釈】

浜千鳥が踏んできた(はかない) あしあと―あなたから送られてくる手紙を手元にとどめながらも、恋しい人に(私への気持ち)を) 問いただしたいものだ。

【別出】なし

【考察】

浜千鳥の歌は『古今集』以来数多く詠まれ、「わすられむ時しのべとぞ浜千鳥ゆくへもしらぬあとをとどむる」(古今集・

雑下・九九六・よみびとしらず・題しらず、「はま千どりあとたえぬればあふさかをふみまどはせる心ちこそすれ」(古今六帖・第五・二八五八・ふみたがへ)などに見られるように、「あと」「ふみ」「とどむ」などととも詠まれることが多い。

第二句の「ふみく(る)」は、「うちよするなみやけつらんはま千鳥ふみこしあとのうら見れどなき」(古今六帖・第五・三三七四・ふみ)、「はま千鳥ふみこし浦にすもりごのかへらぬ跡は尋ねざらなん」(宇津保物語・藤はらの君・三五・あて宮)などの用例がある。「ふみく(る)」の異文が存するのは、「く」と「く」の字形の類似によるものであろう。「ふみみる」には、試しに踏んでみるの意と、手紙を目にする(読む)意とが掛けられるが、その類例として、「へだてける人の心のうきはしをあやふきまでもふみみつるかな」(後撰集・雑一・一一二二・四条御息所女・をとこの女のふみをかくしけるを見て、もとのめのかきつけ侍りける)、「あともなきがづら木山をふみみればわがわたしこしかたはしかもし」(拾遺集・雑賀・一一九九・よみ人しらず・女のもとにつかはしけるふみのつまをひきやりて、返ごとをせざりければ)などが挙げられる。

下句「こひしき人にたづねてしかな」は、動詞「たづぬ」が格助詞「に」をとっているので、「恋しいあの人に尋ねたものだ」と解するのが自然であろうか。とすると、尋ねたい内容が明示されていないので、ここでは「こひしき人」の私への思いと見て、通釈を補った。

もっとも、結句に「たづねてしかな」をもつ歌には、「あかずして枕のうへに別れにしゆめぢを又もたづねてしかな」(後撰集・恋六・一〇三九・藤原かげもと・女のもとにまかりそめてあしたに)、「大虚を春とも見えでちる花の雲のうへにてたづねてしかな」(元真集・一五・ゆき見るところ)、「あきのゆくみづのそこまではなすきまねくかたをもたづねてしかな」(三条左大臣殿前栽歌合・八五・こじじゆう)などがあるが、いずれも「訪ねる」意であり、「尋ねる」ではない。

するとあるいは、恵慶の当該歌も、「恋しいあの人のもとに訪ねて行きたいものだ」と解するべきかもしれない。助詞

「に」は、前田家旧蔵本では「を」になっており、このような意味の不分明な箇所は本文の揺れが生じたと見られよう。

なお、浜千鳥のあしあとを恋人を訪ねる道標と見て詠んだ歌に、「白浪の打ちいづるはまのはまちどり跡やたづぬるしるべなるらん」（後撰集・恋四・八二八・朝忠朝臣・女のもとにつかはしける）がある。とすれば、恵慶の当該歌の上句は、「浜千鳥が踏んでくるあしあとを（恋しき人のもとへの）道標として探し求めながらも」の意に解することもできそうである。ただし、「あとをと（求）む」という表現は、「はま千鳥ふみみてあとをとめよとてたちぞかくれし秋のゆふぎり」（閑谷集・六二二）、「我が跡をおくる人やとめくらんいまふみそむる野路のしらゆき」（隣女集・冬・二二三九・野雪）、「出でてみるのりのあとをとめきてもまだ下もえのわかになし」（雪玉集・六八七三・求若菜）など、すべて平安最末期以後の例と見られる。恵慶と同時代以前の例が見られないことから、この読みの可能性を退けるか、あるいは、恵慶の当該歌を中世和歌の先駆けと見るかは、意見の分かれるところであろう。ともあれ、先の『閑谷集』の例は、上句が恵慶の当該歌と酷似しており、恵慶歌の表現の系譜に連なる歌として、興味深い。

附記 本試注は、筑紫平安文学会で行っている『恵慶法師集』輪読の成果の一部である。既発表分については、以下を参照されたい。

- 「〈恵慶百首〉春部試注」(『純真紀要』〈純真女子短期大学紀要〉第44号、二〇〇四年三月)
- 「〈恵慶百首〉夏部試注」(『純真紀要』第45号、二〇〇四年十二月)
- 「〈恵慶百首〉秋部試注」(『活水論文集』第48集、現代日本文化学科編、二〇〇五年三月)
- 「〈恵慶百首〉冬部試注」(『活水日文』第47号、二〇〇五年十二月)
- 「〈恵慶百首〉恋部試注」(『純真紀要』第46号、二〇〇五年十二月)
- 「〈恵慶百首〉浅香山春夏部試注」(『文藝と思想』〈福岡女子大学文学部紀要〉第70集、二〇〇六年二月)
- 「〈恵慶百首〉浅香山秋冬部試注」(『文化情報学』〈同志社大学文化情報学部紀要〉創刊号、二〇〇六年三月)

なお、用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2とともに、竹田正幸作成の文字列解析器「e-CSA」Ver.1.04を使用した。

KUROKI Kaori (活水女子大学文学部現代日本文化学科助教授)

IMAI Akira (福岡女子大学文学部国文学科教授)

TAKEDA Masayuki (九州大学大学院システム情報科学研究科教授)

TASAKA Kenji (福岡女子大学文学部国文学科教授)

NANRI Ichiro (純真女子短期大学現代コミュニケーション学科助教授)

NISHIHARA Kazue (福岡県立福岡中央高等学校教諭)

FUKUDA Tomoko (同志社大学文化情報学部文化情報学科専任講師)